



## 地球を旅してみても(シンポジウム 始まりをつくる旅、地球を知る旅)

著者	大和田 晶彦
雑誌名	和光大学現代人間学部紀要
巻	8
ページ	256-257
発行年	2015-03-13
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00003812/">http://id.nii.ac.jp/1073/00003812/</a>

## 地球を旅してみて

大和田晶彦 ピースボート・スタッフ（経済経営学部メディア学科卒業生）

「自分探しの旅」とは、誰もが耳にする言葉だと思う。特に大学生にでもなれば、「自転車で日本一周」や「バックパックでアジアを巡る」なんてざらだろう。そもそも探したい自分はどこにいるのか。そりゃあ、今ここにいるのが自分だろう。他のどこにもいるはずがない。「自分探し」なんて都合のいいことを言って、自分の旅に無理矢理理由をつけたいだけではないのか？ 周囲の人間から旅にでる理由を聞かれて羨望のまなざしを受けたいが為に。

旅にでる理由はもっともっとシンプルで良い。

世界遺産を見たい、いろんな人に会いたい、知らないことを知りたい……。

「何となく、地球一周をしたい。」

誰だって、最初のきっかけなんて単純で、大概の理由は後からいくらでもくっつけられる。自分自身、学生時代に初めて東南アジアへ出かけて行って、海外の魅力に取り憑かれた。和光大学に入学するまで日本国内すら廻ったことがない自分にとって、言語も、文化も、伝統も違う人に会うことがとても楽しかった。そんな興奮や感動を一度体が覚えてしまった以上、海外に繰り出さないわけにはいかなかった。

しかし、そこは現実。海外に行くには時間とお金がかかる。お金を稼ぐのには働かなければ行けない。働くということは安定した職に就かなければならない。職に就いたら時間ができない。そうってあーだこーだ言っているうちに年を重ね、次第に行けない理由を次々と見つけてきては、さも“海外に行きたいのにいけないのは仕事のせいです”なんて言ったりする始末。自分を正当化したいが為に仕事に責任をなすりつける。結局、自分が傷つきたくないのである。

「地球一周」と聞くととても大がかりで手の届かない所にある、いわゆる「お金持ち」が行くことのできる特別なようなことに感じてしまう。確かに、自力で計画を立てるのならばよっぽどの根気が無ければ不可能に近いだろう。ただ、ピースボートは違った。

初めての海外、地球一周の旅であればこれほど適した手段は世界中どこを探しても類を見ない。町中で良く見かけるピースボートのポスター。これを貼れば参加費が割引になるのだ。自分が希望したクルーズが出航するその日に、29歳未満であれば最大全額分、割引が適用される。言うなればタダ同然で地球一周ができる。

完全にタダではないのはオプションのツアー参加費やおみやげ代、BARでの飲食代など別途かかってしまうので、そこは自分のさじ加減次第だが。

私はこの制度を利用し、129万円分、約4000枚のポスターを貼って参加費を割り引いた。余談だが、出航当日の預金残高は300円だった。

港に見送りに来た両親には呆れられた。元々自力で何とかするなら背中を押してくれる両親なので、船賃全額分の割引を貯めたと話すと船旅への参加を快く認めてくれた。二つ目の寄港地のシンガポールでメールが入り、「少しだけ餞別を入金したから、自由に使え」と言う内容で、日本から約5000km離れた土地で実家の方を向いてありがとうと叫んだのはここだけの話である。

船はアジアを抜け、インド洋からスエズ運河を渡り、地中海を横断、西ヨーロッパから北欧へ舵を取り、北極圏にも面しているアイスランドへ。大西洋を南下して中南米の国々を訪れ、パナマ運河を一日かけて渡り、いよいよ太平洋へ戻ってきた。アメリカ大陸西海岸を經由し、はるばる太平洋を横断して日本へ。

102日間の航海は、忘れられない記憶となった。

たった3か月ばかりでは横浜の景色は全く変わっておらず、壮大な夢を見ていたのではないかという錯覚さえ覚えた。しかし、周りにはかけがえのない仲間がいて、持っていたノートパソコンには旅先での記録が残っている。何より、日本に帰ってきてからの何気ない日常生活の中に旅先で見て、聞いて、学んだ事が時折顔をのぞかせる。

エジプトのピラミッド、抜けるほど青い空と白い壁が強く印象に残るギリシャのミコノス島、見るものを圧倒するスペインのサグラダファミリア、自然が作り出した芸術、ノルウェーのフィヨルド。

数々の世界遺産もそうだが、各地で出会う人々の笑顔もとても印象に残っている。スリランカで日本語を学ぶ学生と交流したが、現在もfacebookで繋がっている。ベネズエラで貧困と闘っている、スラムに住む子どもたちはみんなまぶしいくらいに笑顔がはじけていた。ニカラグアで一緒に野球をした若者たちと交換したユニフォームは今でも部屋に飾ってあり、見る度に白熱したプレーを思い出す。

この話を聞いて、1%でもワクワクしたら、一度、地球一周に挑戦してみると良い。お金が無いから……。なんて、お金の問題はナントでもなる。そのうち、仕事を始めたら時間がとれなくなって、ようやく時間ができたときは見事に還暦を過ぎている。体力も落ち込み、「若いうちに行けば良かった」と後悔するのである。

体力も、時間もある今、地球に飛び出そう。同じ地球一周の経験でも、10代、20代ですのと60代、70代ですのでは全く違った意味を持ってくる。

一生ものの仲間が、待っている。